



切磋琢磨

【発行日】平成29年9月15日
【発行者】角田高等学校
校長:鈴木 琢也
【連絡先】0224-63-3001

第13回角高祭が無事終了しました！

9月1日(金)、2日(土)の2日間、第13回角高祭を開催しました。

1日(金)の校内発表では、生徒達が企画したミス・ミスターコンテストやクイズ大会が行われましたが、節度を保ちつつもユニークな発表で生徒達も楽しんでいました。その後、演劇部、合唱部、吹奏楽部のステージ発表がありました。特に印象的だったのは演劇部の発表でした。体育館中央に設けられた特設ステージを使って、たった4名のキャストで1時間をかけ自作の脚本の劇を演じきりました。自分達が置かれている今の状況とリンクするような内容で、3年間の思いが詰まった内容でした。会場は独特の雰囲気にも包まれ、次第に劇に引き込まれていくのが分かりました。中には、涙を流して鑑賞している生徒も見られ、圧巻の演技だったと感心させられました。演劇部の皆さん、感動をありがとう。

2日(土)は一般公開でしたが、台風15号が近づくあいにくの天気の中、507名の来場者をお迎えし予定どおり実施することができました。詳しくは、今月末に発行予定の学校だよりでお知らせいたします。

また、一般公開当日は、父母教師会健全育成委員と本部役員の皆さんによる「登校時一声運動」も行われました。校門付近に立って登校する生徒一人一人に挨拶をしていただきました。一般公開中は、校門付近にテントを張って「お休みどころ」を開設していただき、来場者に声をかけ、お茶やお菓子を振る舞っていただきました。早朝から1日中、しかも雨の降る肌寒い中をありがとうございました。



第1回学校評議員会開催！

平成29年7月13日(木)第1回学校評議員会を開催しました。

この会は、学校運営に関して、委員の皆さんからそれぞれの立場での意見や助言をいただき、学校運営に反映させ協力を得るとともに、保護者や地域住民に学校運営の状況を知らせて地域に開かれた学校づくりを推進するために設けられています。

<学校評議員の皆さん>

- 東北大学教育学部助教：清水禎文 委員
- ウィメンズクリニック金上院長：安藤順一 委員
- 元父母教師会会長：坂元貞治 委員
- 民生委員・児童委員：小島さぬ子 委員

委員の皆様からいただいた主な意見を抜粋して紹介します。

- ・授業を参観したが、全体として落ち着いていて良い雰囲気であった。
- ・生徒を伸ばすには安心・安全な学校づくりが大切である。
- ・進路実績よりも生徒が「今日も学校に行きたい」と思うことが大切である。
- ・学習時間を増やすためには、授業の最後のところで知識を定着させることが大切である。
- ・社会に出れば競争しないといけない。高校時代の友人がライバルで競争できるとよい。
- ・良い大学に行くことよりも、将来何になりたいかが大切である。そのための意識付けを。
- ・ホームページの更新が滞っているのが気になる。
- ・角田高校は良い取り組みをしているのでもっとPRしてほしい。

今後の学校運営に活かしていきたいと思います。

第11回秋季宮城県高等学校野球 南部地区予選優勝!

野球部の快進撃が止まりません。8月19日(土)から始まった表記大会で勝ち続け、9月3日(日)には秋晴れの名取市民球場を会場に柴田高校との決勝戦に臨みました。1回裏に守備の乱れを突かれ1点を先制されましたが、7回表に相手のエラーを誘って同点に追いつくと延長戦に突入し1点を争う好ゲームとなりました。10回表にタイムリーヒットにより1点を加え、そのまま10回裏の相手攻撃を0点に押さえ2対1で勝利しました。

一進一退を繰り返す中、最後まで粘り強く投げ切ったピッチャーの太田悠雅君が優秀選手に選ばれました。野球部の皆さん清々しい試合をありがとう。県大会での活躍も期待しています。



●特別寄稿 「福住荘というアパートのこと」 教諭 中木 利幸

大学生の時、札幌のアパートに住んでいた(7年間も同じ所にいたので、管理人のおばさんともすっかり仲良くなり、ずっと年賀状もやりとりしていたが、数年前に亡くなってしまった)。六畳一間、流しはあるが、トイレ共同、風呂はなし(10分くらい歩いて銭湯に行く。その銭湯の名は大学湯!)。家賃はたったの一万五千元。近くに東急ストア(ヨークみたいなもの)があり、便利だった。大学へは地下鉄や自転車、徒歩でも行けた。昼飯は大学の生協の食堂で済ませるが(ランチ230円!)、夕飯はアパートで自炊。料理もけっこう覚えた。

たまにお袋から手紙が来る。すると、たいいてい、一万円札が入っている。だいたい自分が金に困っているときだ。ありがたくて本当に涙が出た。親元を離れないと、親のありがたみは分からない(みんなも家を出て一人暮らしをしなさい)。分かると自然に孝行するようになる(しかし、そのおっかあは孝行する前に逝ってしまった)。

さて、大学六年目の四年生の時(つまり2回留年したのだが)、卒論以外何もすることがなかったのので、ロシア語の力をつけようと、ロシア語演習の授業を勝手に(履修届けを出さずに)受けていた(ちなみに、わたくしは、北大の「文学部文学科ロシア文学専攻課程」という、大変長い名称の学科出身)。その授業はロシア語の構文の演習で、二、三行の文章を日本語に訳すというもの。予習してきて、当てられたら答えるという形式だ。たった二、三行の文章なので辞書を引けば簡単に訳せるだろうと思うかもしれないが、実はかなり難しいのである。英語で言うと関係詞の構文かな。

前の日に予習をする。夜十時くらいから。一読しただけでは分からない。辞書を引く。単語に訳語をあてはめても、日本語にならない。「うーん」と、うなる。考えること10分。あっ、とひらめく。「この単語はこちらでなく、あちらにかかるんだ」という感じである。この「分かった!」時の感動は、経験しなければ分からないと思う。

たまに(というか三題に一題くらい)難問にぶつかる。10分では無理。時間の感覚がなくなる。考えに考え抜いて、ようやく分かった。時間を見ると一時間が過ぎていて、二、三行の文に一時間!これが青春だ!

時計を見ると二時である。五時間くらい寝て大学へ行き、授業を受ける。「俺に当ててくれないかな」と期待していると、期待通り当ててくれる。わたくしが読んで訳す。すると先生(教授)が「その通り。」と言ってくれる。もっと難しい文章が四年目四年生の後輩の女の子に当たる。「分かりませんでした…」。「そうか、じゃあ、中木さん」とわたくしに当てる(教授は男だが、わたくしのことを授業中は、さん付けで呼んでいた)。わたくしは得意になって、しかし真摯に、例文を読み、訳す。先生は「その通り、よく分かったな」とほめてくれた。それ以後、誰かが「分かりません」と言うと、すべてわたくしが答えることになった(少し言いすぎ)。これほどうれしいことはない。教授は、わたくしの実力を評価してくれたのだ。

たった二、三行の、しかし、とてつもなく難しいロシア語の文章。これを一時間かけて、辞書を引き、文法書(みんなの場合、デュアルスコープ)をめくり、頭を使って、訳す。安アパートの部屋の中で。そう、安アパートの部屋は、自分の自由な世界なのだ。何でも出来る魔法の部屋なのだ。スピーカーを作り、それで音楽をがんがん鳴らし、友達と駄弁って(だべって)、ガンダムを見て、サンマを焼いて食い、英語を読み、ロシア語を訳し、六畳に五人が寝れる、本当に何でも出来る部屋だった。

何度も言う、親元から離れて、一人暮らしをしろ、と。悲しくなって一人で泣け、と。青春の価値は孤独だ。